

# 有名人との邂逅の機縁

～宮澤喜一（政治家）、稲盛和夫（経営者）、高坂正堯（国際政治学者）～

2023年2月6日（月）

「私の履歴書研究会」

東京グリーンパレス・ホテル

元住友銀行専務取締役・元広島国際大学教授 岡部 陽二

URL ; <http://www.y-okabe.org>

E-Mail; [tho@bp.iij4u.or.jp](mailto:tho@bp.iij4u.or.jp)



# 1、宮澤喜一(大蔵官僚・政治家、1919～2007)

- 東大法学部卒、大蔵省大臣秘書官、自民党宏池会会長、竹下内閣・副総理、鈴木善幸内閣・官房長官、第3次中曽根内閣・大蔵大臣を経て、72歳で首相(1991/11/5～1993/8/9)、初代財務大臣(2001/1/6～4/26)
- 1991年秋の総裁選で小沢一郎・金丸信の支持を得て自民党総裁に就任、1985年のプラザ合意が招来した円高を巡って中曽根首相をの経済運営を批判、大蔵大臣を要請され、円高是正に奔走した手腕が買われたが、結果的にはさしたる成果は挙げられなかった。
- 2001年には、首相経験者が再び財務大臣としてバブル崩壊後の金融混乱收拾に当たった。「平成の高橋是清」と称され、宮澤構想自体は立派なものであったが、自民党の支持を得られず不発で、逆に混乱を深め、失われた30年に突入した。
- 酒豪で、毒舌家。首相の中では抜群の経済通ながら、実行力に欠けた。

## 宮澤喜一さんとの一期一会の出会い

- 1992年4月5日にホテル・オークラ・平安の間で行われた「高木智巳さんと高橋奈穂子さんの結婚式」の主賓席で隣席となり、2時間近くにお互いに親しく話をした。その後、保土ヶ谷カントリーでお会いした時も、よく憶えていてくださった。
- 当時はロンドン駐在で、①サッチャー首相辞任後のメジャー党首が1992年4月の総選挙で辛勝はしたものの過半数はとれず「ハング・パーラメント（宙づり議会）」となったが、その予想、②1992年2月にマーストリヒト条約が締結されてEU発足が決まったが、その後の展開見通しなどについて、首相から次から次へと質問が寄せられ、回答に大苦戦であった。
- この結婚式は新婦・奈穂子さんの祖父が、宮澤喜一の後援会長であったご縁から、現職の首相で参席されたものである。ご挨拶だけではなく、最後まで臨席されたのは驚きであった。父の高橋督さんの結婚式も宮澤さんが主賓の挨拶をされた。
- 高橋督さんは住友銀行で1年下の同僚。銀行を中途退職して、娘婿で呉砥石・クレノートン社長となった。35年後に、長女の奈穂子さんがロンドンへ留学したご縁で、私の帰国日程に合わせて、結婚式の日程が決められたので、当然主賓かと思っていたところ、宮澤首相に快諾いただき、首相が主賓となった次第であった。

## 2、稲盛和夫（実業家、経営者、1932～2022）

- 1955年に鹿児島大学工学部卒、京都の碍子メーカー・松風工業に入社、1959年に退社して、仲間と共に京都セラミックを創業、1971年に大証上場、1982年に関連会社4社を合併して「京セラ」に改称。1986年に会長。
- 1984年にセコムやウシオ電機などとDDI(第二電電)を立ち上げ、2000年には3社合併でKDDIが成立、名誉会長に就任。
- 2005年に京セラ取締役退任、娘が3人いたが、松下幸之助のように娘婿をとってまで世襲することはまったく考えなかった。
- 2010年に請われて日本航空名誉会長に就任、2年で立て直しに成功。
- 社員全員に経営者意識を持たせるように、工程別、製品群別にいくつかの小さな組織に分け、それぞれがいくつかの中小企業のように独立採算で自主的に運営して、自己増殖する「アベバ経営」方式を発案した。
- 京都賞の創設や盛和塾の開講など、社会貢献にも尽力した。

## 稲盛和夫さんとの一期一会の出会い

- 京都セラミックは**1976年2月**に初の**ADR**(米国預託証券；外国企業の株式を裏付けに米国で発行された有価証券)を発行した。その前年**1975年**の**10月7日**に、当時は京都の山科にあった同社本社で主取引の三和銀行、住友銀行、野村証券**3社**の東京担当部との打合せ会が行われることとなっていた(**ADR**の詳細にわたる事務手順の打ち合わせであり、京都の取引店では対応できなかった)。
- 当行は、当時大宮支店長であった同期の松本淳一郎さんが稲盛社長に食い込み、ようやく三和に次ぐ二番手の取引行としての地歩を固めていた。彼から当時、国際金融部次長であった私に打合せ会への参加依頼があり、証券班長の飛松集一さんを伴って**3人**で出席した。
- ところが、その前日から台風**13号**が関西を直撃、新幹線も不通となったため、三和・野村の担当者は東京から来られなくなった。我々**2人**は前日から京都に宿泊、予定どおり**10時**に同社本社を訪ねた。稲盛社長から、それでは当行で他の**2社**分もカバーして説明してもらえないか要請あり、**2時間**余にわたって差しで質疑を全部こなし、細部まで決定した。
- その結果、この取引は当行で行なってほしいと言われ、深夜に東京の当行電信室とニューヨークを繋いで、無事**ADR**が発行できた。成功祝いに、後日フランキー堺さんを招いて料亭・新喜楽で盛大なご接待をしていただいたことを今でもよく憶えている。
- 稲盛社長は、シャイな性格ながら、納得がいくまでとことん詰める粘り強い方であった。

### 3、高坂正堯（京大教授、国際政治学者、1934～1996）

- 1953年、京都府立洛北高校卒業、京大法学部入学、猪木正道教授に師事し、法学部では傍流であった国際政治学を専攻、1957年卒業と同時に助手、1959年に助教授、1971年に教授。静岡文化芸術大学の学長就任が決まっていたが、62歳で早世した。
- 哲学者高坂聖剣正顕の次男。国際政治学や欧州外交史を専門とし、現実主義（リアリズム）の立場から理論を展開、以後の日本の国際政治学に大きな影響を与えた。主著に『古典外交の成熟と崩壊』『国際政治』『宰相吉田茂』『海洋国家日本の構想』など。
- 一般に社会科学者らの著作は時を経ると時代遅れになるが、高坂の著作は没後20年以上経ても「現代の古典」として研究者たちに読まれ続けている。「文藝春秋」2023年1月号は明治以降の日本を代表する「101人の輝ける日本人」の一人に高坂正堯を選んでいる。
- 中曽根内閣などの外交ブレーンとして登用され、外交政策に関わった。茶目っ気でユーモアたっぷりの関西弁でのコメンテーターとしても幅広く活躍した。京大では軟式野球部に所属し、熱心な阪神ファンでもあった。囲碁はめっぽう強く、京大囲碁部のキャプテンを務めた。
- 高坂は、平和は「恐怖の均衡」によって成り立つと説いている。彼の考えでは、平和とはのんびりとした恐怖の存在しない状態ではなく、力と力が鋭い緊張関係の中で均衡を保っている状況である。高坂が生きておれば「ウクライナ侵攻を非難するだけで満足してはいけない。その上で、より良い国際秩序を構築するにはどうすればよいか、もっと議論しなければならぬ」と、力説するであろう（中西寛京大教授）。

# 高坂正堯君の幼少期回想と出会い

- 2018年8月16日に上梓した私の自分史「国際金融人・岡部陽二の軌跡～好奇心に生きる」に目を留められた中央大学・総合政策学部教授、服部龍二先生から「本書には高坂正堯の幼少期を知るうえで貴重な資料が盛り込まれているので、さらに詳細にわたりインタビューに応じてもらえないか」打診があった。予想だにしていなかったお申し出に驚いた。
- 服部龍二先生は1992年京大法学部卒、新進気鋭の国際政治学者で、2018年10月に中公新書で「高坂正堯～戦後日本と現実主義」を出版されている。
- 私の自分史には、①中・高時代の洛北塾での交遊、②大学入学後の京一中洛北同窓会での永末英一元民社党党首との邂逅、③ロンドンでの国際戦略研究所への往訪などを中心に高坂正堯の人物像が鮮やかに描かれており、これがこれまでほとんど知られていなかった高坂正堯の人格形成を知るうえで大いに役立つという服部先生のお話であった。
- 1953年に洛北高から京大法学部に現役で合格したのは、高坂と私の2人だけであった。
- このインタビューは服部龍二編「元住友銀行専務取締役岡部陽二インタビュー～学生時代の高坂正堯」として、2020年3月13日刊行の中央大学「総合政策研究」第28号に18ページに及ぶ学術論文として掲載された。[http://www.y-okabe.org/writings/post\\_419.html](http://www.y-okabe.org/writings/post_419.html)にPDF版を入れてあるので、ご覧いただきたい。
- 洛北塾で高等数学を教わった海兵出身で、当時京大助手であった桑垣煥先生(元立命館大教授)から受けた影響は大きかったかも。桑垣先生はルービックキューブのような数学玩具の開発者でもあった。